

「欲を成じて」考：徒然草・第二一七段異見

川平，敏文
九州大学大学院：教授

<https://doi.org/10.15017/6770319>

出版情報：文献探究. 60, pp.33-34, 2022-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



「欲を成じて」考 ― 徒然草・第二一七段異見

川 平 敏 文

徒然草・第二一七段は、いわゆる「大福長者論」である。

ある大福長者が、金持ちになる秘訣は、欲望を徹底して抑制することであると語る。「欲に随ひて志を遂げんと思はば、百万の錢ありといふとも、暫くも住すべからず」。よつて欲望が心に思い浮かんだら、自分を滅ぼすべき悪念が来たと思つて、絶対にそれに従つてはならない。そうすればおのずから金が貯まり、「所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し」、すなわち、欲望を叶えずとも心は安樂になるという。これを聞いて兼好は反論する。そもそも人というのは、「所願を成ぜんがために」金を貯めるものである。なのにそれを使わないのであれば、貧乏人とまったく同じだ。それでは、何の楽しみがあるというのか、と。そうして、次のようにいう。

「欲を成じて樂しびとせんよりは、如かじ、財なからんには」。

この一文が、ただいま小文の問題とするところである。

○

兼好は、「欲望を満たして樂しみとするよりも、最初から財がないほうがよい」という。そしてこれのような比喻でも言い換える。「癰疽を病む者、水に洗ひて樂しびとせんよりは、病まざらんには如かじ」。「癰疽」とは悪性の腫瘍のこと。それを病む者が、患部に水をかけて心地よさを感じるよりも、最初から「癰疽」を病まないほうがよい、と。

両者の訳を並べてみると次のようになる。

① (財)をなす者が、欲を満たして樂しみとするよりは、最初から財がないほうがよい

② 癰疽を病む者が、水に洗つて樂しみとするよりは、最初から癰疽を病まないほうがよい

二重傍線を付した「財」と「癰疽」、波線を付した「欲を満たして」と「水に洗つて」が対比的構造になっている。

ところが、兼好が紹介した大福長者のポリシーは、①のようなものではなかった。上に見たように、大福長者は逆に、「欲を成ぜざる」と(金を使わないこと)を、樂しみとしていたのである。もう一度引くが、彼は「所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し」と言っている。とするならば、「欲を成じて樂しびとせんよりは」という通行の本文は、大福長者への批判の言としては、文脈的に少し無理があるのではないか。

あるいは、ここでいう「欲」を、一般的な「欲」を否定してまで富を守ろうとする、より高次元の「欲」と解するならば、どうにか文脈は通じるだろう。しかしながら大福長者は、前述のように、一般的な「欲」のみを問題としていたのであるから、ここでいきなり、そのような高次元の「欲」が出てきても、読者は戸惑うほかないのである。

○

このような違和感をもつのは私だけなのだろうか。と思つて少し調べてみると、山田俊夫『文法対訳 全解徒然草』(健文社、昭和二十九年)なる受験参考書に、「成じて」は「制して」の当て字か、との説が見えるのが注意される。本来は「制して」とあるべきところを、「成して」と当て字で書いたのではないか、というのだ。たしかに「制し

て」ならば、すっきりと意味は通る。しかし、本章段には別に「所願を成ぜざれども」という用例があり、そこで「成ず」は文字どおり「成就する」という意味で使われている。同じ章段のなかで、同じ字をまったく逆の意味で使うのは、きわめて不自然な行為と言わねばならないだろう。したがって山田氏の当て字説には、にわかに与することができない。

しかしこの山田説以外に、現代の代表的な注釈書で、この箇所疑義を呈しているものは見受けられないようである。兼好の飛躍した論理を付度して理解しているのか、論理の展開に追いつけず問題を看過しているのか、そのどちらかであろう。

○

では、もし山田氏や私の不審が当を得たものであったとするならば、本来はどのような形であったのであろうか。

たとえば、本来は「欲を成ぜずして」と「樂し」と「せんよりは」とあったところが、書承の過程で「ぜず」が見落とされ、「成して」と写されてしまったという可能性はどうであろうか。

あるいは、「欲を成じて」の「成」という漢字が、草書体の字形のやや類似する「滅」の誤写であった可能性などは如何。「欲を滅して」樂しびとせんよりは「ならば、文脈的には通りがよい。

ただし徒然草の諸本で、これらの異文をもつものは、現時点で確認できない。その意味で、今のところこれらの誤脱・誤写説は、あくまでも私の推測（妄言）の域を出ないのであるが、「思しきこと言わざるは腹ふくるるわざ」、あらためて疑義を呈するとともに、後考に備えんとするものである。

○

ちなみに、この箇所にかんする文脈の混乱は、じつはこのあとの文章にも表れている。通行本の底本とされる鳥丸本は、前掲のとおり、「欲を成じて樂しびとせんよりは、如かじ、財なからんには」となっているが、正徹本・常縁本を始めとするいくつかの古写本では、ここが、

「欲を成じて樂しびとせんよりは、如かじ、欲なからんには」となっているのだ。これだと、「欲を満たして樂しみとするよりは、最初から欲がないほうがよい」という意味となる。

この章段のテーマは、大福長者の禁欲主義であるから、一見こちらが正しいのではないかという気持ちになる。しかしこの文章は、「そこまで非人間的な禁欲に徹するのであれば、金持ちであったとしても貧乏人と変わらないではないか」という文脈で語られるのであるから、「それならば最初から貧乏人と同じ立場、すなわち財がないという境遇であったほうが、気を遣わなくてよい」というような文章が、ぜひとも想定されなければならないだろう。やはり、「財なからんには」のほうがよい。

以上、前述のような誤脱・誤写説を妄想するゆえんである。識者のご意見を仰ぎたい。

（かわひら としふみ・九州大学大学院教授）